

夏の夜の風物詩、線香花火。安価な輸入品に押される一方だった国産品が、少しずつ復活してきている。東京の下町で花火問屋を営む山縣常浩さん(68)に、その楽しみ方を教えてもらった。  
(生活情報部 森谷直子)

ぎっしり積まれた棚の一角に、「大江戸牡丹」「不知火牡丹」など風流な名前を付けられた線香花火の袋が並んでいた。  
日本で流通する線香花火の大半を中国製が占める中で、今、これらの希少な国産線香花火が、大人に注目されているのだという。  
「線香花火は、江戸時代に

生まれた日本独自の文化。松を燃やしたススである松煙などの原料の質や火薬の配合、和紙に火薬を包む職人の技術によって、出来が違ってくる。国産は原料も職人の技も高水準で、火花の美しさが違う」と山縣さんは胸を張る。  
線香花火は、火花が4段階に変化する。玉が長持ちし、「牡丹」「松葉」「柳」「散り菊」にたとえられるその起承転結がくつきりと出るのが、国産品の特長だという。「大江戸牡丹」に実際に火をつけて見せてもらった。最初に「シュボシュボツ」と、太く短い火花が散り、先端に小さな丸い火の玉が形作

られる。これが「牡丹」。準備を整えるかのように、しばらく間をおいてから、「パチパチッ」という威勢のいい音と共に、大きな火花が盛んに散り出す。細かく枝分かれした火花が「松葉」のようだ。火花は大きい時で半徑20センチほどあり、線香花火を持つ手に届きそうだ。  
やがて音は「シュルシュル」に変化し、細い火花が流れ星のような「柳」に。そして「散り菊」。最後のひと花を咲かせるように、小さな火花が繰り返して散る。  
輸入品は松葉の後にあつてなく玉が落ちてしまうことが多いというが、「国産は、ここから長いんですよ」と山縣さん。しぶとく菊の花を咲かせ続けた後、ふと玉が落ち、後には静かな余韻が残った。「まるで人の一生みたいでしょう。これをぜひじっくり味わってほしいですね」  
1980年代以降、国内の線香花火が次々に製造中止となった。「日本の伝統を守らねば」と考えた山縣さんは、愛知県のメーカーと協力して「大江戸牡丹」を開発、2000年に売り出した。同時期に群馬県と福岡県のメーカーも、高品質な商品を発売。1本50円前後から、200円以上するものもあり高価だが、昔ながらの花火の見事さや希少性が話題になり、贈り物や自分で楽しむために購入する大人が増えているという。  
「せっかくなら浴衣を着て、昔ながらの夏の夜の花火の雰囲気を楽しんでみては」と山縣さん。夜の会合に手みやげとして持参し、大人同士で楽しむのも良さそうだ。

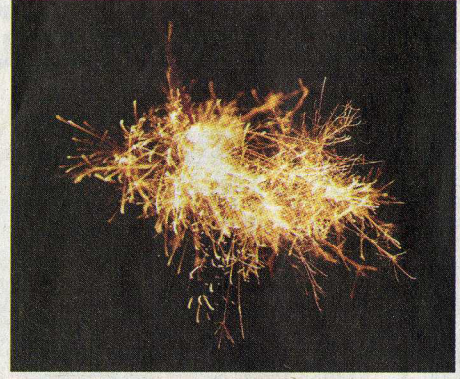


国産線香花火「大江戸牡丹」。松葉のように華やかな火花が盛んに散る(東京・台東区で)＝永尾泰史撮影

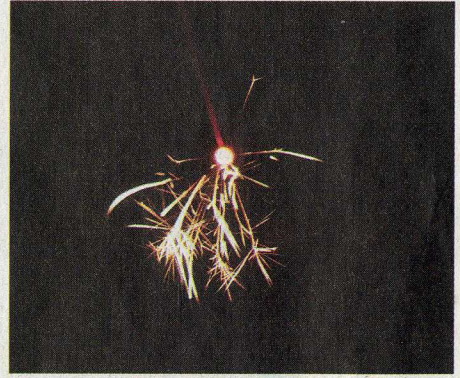
# 線香花火 起承転結の美



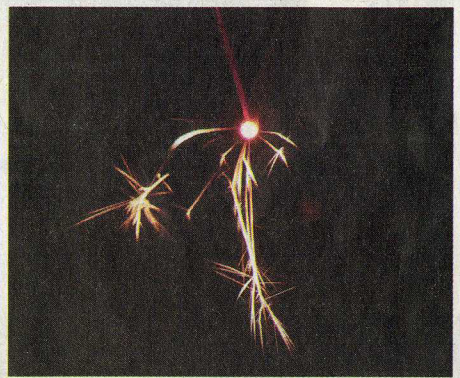
「牡丹」と呼ばれる第1段階。小さな火花とともに、丸い火の玉が形作られる



「松葉」と呼ばれる第2段階。細かく華やかな火花が盛んに散る



「柳」と呼ばれる第3段階。柳の葉のような細い火花が静かに流れ落ちる



「散り菊」と呼ばれる第4段階。菊の花びらのような火花が繰り返し散る

## 紙箱や木箱に保管



線香花火以外の国産おもちゃ花火も、1本100円以上とやや高価な「大人向け」商品が増えている  
国産の線香花火は、一部の百貨店や雑貨を扱うセレクトショップなどで販売されているほか、メーカーによっては電話やインターネットで直接注文に応じている。  
「良質な線香花火は、製造から年月がたつと、火薬がなじんで安定し、火花がさらに美しくなるんですよ」と山縣さん。「保管場所は、湿気と火の気厳禁。ビニール袋に密封すると湿気がたまりやすい。紙箱や木箱に入れ、乾燥剤も入れておくといいですね」とアドバイスしている。

きれい  
KIREI

線香花火以外の国産おもちゃ花火も、1本100円以上とやや高価な「大人向け」商品が増えている

やまがた・つねひろ 1942年、東京生まれ。1914年創業の花火・玩具問屋「山縣商店」(東京都台東区)の4代目社長。1990年代から、消えゆく国産線香花火を守ろうと、地方に残る国産品を探しては、パッケージを工夫して売り出すなどの取り組みを続けている。

「和紙に火薬を包む『より手』と呼ばれる職人も、若い世代が育ってきています」と話す山縣さん